

授業づくりを中心としたキャリア教育

教科・領域 各教科 道徳

柳井市立柳井中学校全学年

キャリア教育の観点

この取組は、キャリア教育が教科・科目等の教育活動全体を通じてなされるものであるという本質に基づき、教育活動の中で最も時間を占めている授業に着目し、キャリア教育で求められる実践能力を育成するための共通の授業構造に基づき、授業を通して課題を解決する力やコミュニケーション・スキルを高める活動です。

【人間関係形成・社会形成能力】【課題対応能力】

キャリア教育で求められる実践能力を高める授業構造

柳井市では、平成21年度から、「発達段階に応じたキャリア教育支援事業」のモデル地域指定を受け、小中が連携したキャリア教育のあり方について実践的な研究を進めてきた。実際の世の中は課題解決の連続であり、その課題の多くは自分ひとりの力だけで解決できるものではない。このような課題に直面した時に、力強くそれらに立ち向かっていくためには、意欲・態度、思考力・判断力・表現力、人間関係形成能力、課題対応能力、そして基礎的・基本的な知識・技能などの実践能力が求められる。実践能力は業務遂行に必要な多様な能力の集合体である。これらの要素は、大きく次の二つに分けることができるだろう。一つは、仲間と知恵を出し合いながら、直面した課題の解決策を作り上げていくために必要な能力である。授業においては、「課題解決に有効なコミュニケーション能力」と位置付けることができる。そしてもう一つは、「課題解決に必要な知識・技能」である。授業においては、各教科の目標から導き出される学習内容と置き換えることができる。これらのことを満たし、授業で育成された能力が将来社会人となったときに職場で発揮されるようにしていくことが大切である。そのためには、実際の職場で行われている課題解決のプロセスを参考に、授業をつくるのが有効だと考えた。そうすることで、課題解決に向けて仲間と知恵を出し合いながら答えを見出していく授業構造が見えてきた。

(1) 「広げる発問」によって子どもの課題追究をスタート→授業の起点「追究すべき課題」の設定

※課題解決に有効なコミュニケーション能力を身に付けさせるための中核

(2) 「学習活動のめあて」

→課題解決に向けての話し合い活動の技能を高めしていくための具体的なゴールやルールの提示

①ゴール・・・優劣を決める、合意形成をする、第三案をつくる等

②ルール・・・意見の異なるグループが交互に意見を言い合う、理由を説明して論点を転換する等

(3) 「解決の糸口の提示」

→議論の停滞、論点の分散、安易な結論に陥った生徒に新たな視点や情報を提示

(4) 「深める発問」の提示

→新たに発見した課題解決の手がかりを生かした課題解決に近づくための問い

社会科における実践例～学習指導案～

題 材 アジア州の経済発展の要因を探る

主 眼 中国、韓国、インド、インドネシア、サウジアラビアの5カ国の中で、今後どの国が最も経済発展するかという要因を考えるを通して、アジア州の地域的特色を理解することができる。

学習過程（教師の4つの役割については□囲み）

	学習内容・学習活動	予想される生徒の反応	教師の支援
課題の設定	1 課題の確認		
	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">「アジア州の中で、今後どの国が最も経済発展するか予測しよう。」【広げる発問】</p> <p>①エキスパート活動 班員を中国、韓国、インド、東南アジア、サウジアラビアに振り分け、国ごとに新たな班をつくり、その国が経済発展する要因を挙げた前時の学習を想起する。（個人）</p>	<p>①ア 中国は豊富な労働力や資源があり、技術力もある。 イ 韓国は海外との結びつきが強く、先端技術産業が得意。 ウ インドはIT産業が成長し、アメリカとの結びつきが強い。 エ 東南アジアは賃金が安く資源も豊富で発展しつつある。 オ サウジアラビアは世界最大の産油国であり、金融や観光業も充実している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・班の中で担当する国を決定し、各班の同じ国担当の生徒同士で新たな班を結成し、調べ学習を行ったことを確認する。 ・同じ国を担当する人で結成した新たな班で協力しながら、既習事項や資料集、地図帳を活用して、担当した国が経済発展する要因をプリントに記入したものを手元に用意させる。
展 開	2 意見の表出と検討 ② ジグソー活動 各国の特色を出し合い、班としての意見をまとめる。（班）	② 各国の立場からの意見を出し合い、視点ごとに比較・検討する。視点（資源・労働力・賃金・他国との結びつき・技術力・教育・宗教・自然環境・位置など）	<p style="text-align: center;">「担当した国の情報を5つ以上積極的に発信しよう。」【学習活動のめあて】</p>
	3 班の意見発表 ③ クロストーク 各班で決定した国を、理由とともに発表する。（斉）	③ア 中国は世界の工場と呼ばれ、発展の条件が揃っている。 イ 韓国は東アジア最大のインチョン国際空港があり、加工貿易を得意としているから。 ウ インドは若者が多く、市場が大きく、今後の伸びが期待できる。 エ 東南アジアは、資源が豊富でASEANとしての経済協力体制がある。 オ サウジアラビアの原油ほどの国にとっても欠かせないエネルギー資源だから。	<ul style="list-style-type: none"> ・国の立場を明確にして発言することで、視点ごとに比較・検討し、最も経済発展しそうな国を決定することをルールとして提示する。 ・必要な視点をアドバイスすることで、意見を国ごとに比較・検討しやすいようにする。 ・表出した意見のキーワードを板書する。 ・その国が選ばれた理由が明らかになるように切り込んでいく。 ・他の国はなぜ選ばれなかったのかという問いで、経済発展に必要な要素を明らかにしていく。
ま と め	4 日本との関わり ④ 日本企業の海外進出を考えることで、日本が各国とどのようにつき合っていけばよいのかを考える。（斉）	④ア 資源の豊富な国に進出し、安定して輸入できるようにする。 イ 技術革新のためにライバル国に進出し開発を競う。 ウ 市場の大きな国へ積極的に進出し高齢化社会に向けた新たな産業を創出する。 エ 途上国に技術提供をして協力する。	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; padding: 5px;">「今後、日本の企業はどの国に進出していくべきだろうか。」【深める発問】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特定の国に意見が偏ると思われるので、それ以外の視点を教師から提供する。 ・日本が置かれている状況（少資源、韓国に先端産業分野を抜かれている、少子高齢化、高賃金、産業の空洞化が起きている等）を確認し、日本が今後発展していくための方策を考えさせる。 ・きめ細かなアジアの情報を集め、共同でアジア経済を支え、共に発展していく方向で話をまとめる。

評 価・アジアの地域的特色を踏まえたうえで、日本のアジア州における立ち位置について自分なりの考えをもつことができたか。

・話し合い活動において、自分のもっている情報を積極的に提示しながら課題解決ができたか。

知識構成型ジグソー法の活用

前掲載の指導案の中に、エキスパート活動やジグソー活動、クロストークという文言があるが、これは東京大学教育支援コンソーシアム推進機構（C o R E F）が提唱している協調学習の知識構成型ジグソー法の手法を用いている。課題解決に必要なコミュニケーション・スキルを高め、言語活動の充実を図るために有効な手立てとして、各教科で積極的に取り入れるようにしている。その手法は、班員のそれぞれが別々の情報を持ちより、それらの情報を出し合って共通の課題に取り組むというものである。他人に説明しながら自分の考えをはっきりさせ、他人の考えを聞いて理解したり参考にしたりして、いろいろな考えを理解・判断・統合していく活動により納得のいく答えが得られたり、個々の理解が促進されるという建設的相互作用が起こるとされている手法である。以下に、方法を示す。

言語活動の充実を図るための協調学習『知識構成型ジグソー法』の活用

①解きたい問いを共有し、

1班 AAA 2班 BBB 3班 CCC

②各自がその問いを解くのに必要な「部品」を担当して、少しずつ違う考えをそれぞれ説明できるようにし、

【エキスパート活動】

部品1 ABC 部品2 ABC 部品3 ABC

③説明を統合しながら答えをいろいろ探すと【ジグソー活動】

1班 AAA 2班 BBB 3班 CCC

④説明したり、聞いて理解したりの自然な交代がおき、一人ひとりの理解が促進される。

【クロストーク：クラス全体での意見交換】

ジグソー活動を行っている様子



考察・課題・改善

キャリア教育で求められる実践能力を授業で高める取組の長所は、小中の教員が連携し、9年間を見通した一貫性のある指導体制がとれるところと、全教員が人間関係形成・社会形成能力や課題対応能力を意識して授業をすることで、行事などと関連付けて日常的に実践能力を高めていくことが可能であるところである。本校では、一人一授業という取組を毎学期行っている。実践能力を育む授業構造を意識した指導案をつくり、互いに授業を見せ合い、改善していく研修を進めることで、生徒に無理なく実践能力を身に付けさせることができると考えている。

課題としては、毎時間の授業をキャリア教育で求められる実践能力を高めるための授業構造に基づいて行うことは難しく、教科や単位によって取組に差が出ていることである。改善点として、授業参観者が右図の授業記録を書くことで、授業者と参観者のスキルを高め、効果的な授業となるように研鑽を積んでいくことを取り入れている。

